

## 新東亜論\*



合田 素行

我々の住む東アジア地域の21世紀の姿をどうつくりだしていけばよいのか。アジア地域を長く研究対象としてきた著者が、改めて初心に帰る気持ちで回答を見いだそうとして書いたのが本書である。起承転結の四つの章で構成されている。起の章では、グローバリズム跋扈の中で、世界を見る枠組みの転換が必要であること、とくに20世紀後半のアジアの経済成長後の東アジアの経済システムの構築が求められていることがまず指摘され、承の章で、東アジア経済圏の競合と補完、重層的追跡過程の現状を見たあと、資本・資金の流動化というグローバル・ガバナンスのもとで新たな地域主義等「新しい東亜」の姿が求められ始めている、ことを言う。

さて転の章では、それではその新しい地域をどのように見るか、東亜地域の構図を、経済のみならず歴史、風土の観点も含んだ陸のアジア、海のアジア、そして世界単位としての日本という枠組みで示し、最後に結の章で、以上のような様々な地域を有するアジアの動きは、複線構造(トインビー)という歴史の基本リズムに乗りながらも経済システムは何らかの地域統合を不可欠としている、と述べて、「モノの生産面では競争しながら、各種情報・知識の交換・交流面では補完しあえるような、分権的な諸国民国家の併存体制の確立」の必要性を説く。各章の最後に「経済の解釈学」「日本人のアジア意識」「ユーラシア・セントラルとイスラーム」「国柄・地域柄を保守する思想」という比較的長いコラムが付せられ、これまでのそしてこれからのアジアを考

えるために勉強しておいた方がよいことがらが、広範な読書をバックに埋め込まれていて興味深い。要は考え方の転換であるが、転換の根本にある基層にも著者は眼が向く。

我が家の高校生と浪人生に、アジアの国々に行きたいか、と聞くと2人ともイヤだと言う。親のヨーロッパ信仰の反映かも知れないが、アジアを好まない一群の子供たちがいる。一方、国内旅行とほとんど同じ感覚でアジアで過ごす若い人たちもまたいる。外国に対する見方やその認識方法は、経済活動と交通・情報手段の驚異的な発展ですっかり変わってしまった。子供たちと本書はそうした背景を共有する筈だが、本書では地域の多様性は語られるが、考える側の多様性の伝わりかたは少ないように感じた。アジアに対して彼らの親の世代はアンビバレントな感情を持つ。議論が続いている戦争責任の問題もそうだが、我々はアジアなのかどうか、という気持ちである。

著者が引用する高谷好一『地球地域学序説』(弘文館)には、「私たちは絶対に一元論的思考にたつ必要がある。それぞれが個性を持ち続けながら、なお全体で一つであるという考え方」という言葉があるが、この言葉からは家族のことが連想される。そして家族となると、東亜一元論という連想になり、本書の始めに戻るといふ気分を味わう。

本書と同じ頃、木田元『マッハとニーチェ』(新曜館)を読んだ。19世紀末、数多くの哲学者、文学者が共通に胚胎しかつ共鳴しあった思想の醸成の様子が書かれている。木田によれば20世紀思想の誕生であり、それ以前の思想からの転換であるが、この転換の萌すところには、いわば生活の豊かさと科学技術の進歩、それに支えられたアモルフな大衆社会の出現があった。私はどうもこの大衆社会の方が気になって仕方がない。これは21世紀になってもまだ解決されない、というより常に新しい問題を発生させ続けるのではないか。

注・\*原洋之介(20023), TT 出版.